

「入潮為」(万葉集一三四番歌)の訓読について

阿部, 美菜子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

76

(開始ページ / Start Page)

12

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

2007-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010152>

「入潮為」(万葉集一二三四番歌)の訓読について

阿部 美菜子

はつめい

塩早三しほはみ 磯廻いそまに荷居者をれば 入潮為いしほ 海人あま鳥屋見とやみらむ濫たび多比由久ゆく
和礼乎われ(卷七・一二三四)

これは、万葉集巻七の雑歌、羈旅作歌九十首(一一六一―一二五〇)の中に含まれ、旅をしている「我」が、潮の早さに船を進めかねて磯辺に居ると、自分は旅人ではなく海人と見られているのだろうと案じる歌である。第三句原文「入潮為」の表記は集中他に例がない。その訓みには「カツキする」「アサリする」「イホリする」の三通りの説があり、諸注釈書は第三句「入潮為」を次のように訓んでいる。

・カツキする↓「全集」「集成」「全注」「新全集」「新大系」

「釈注」

・アサリする↓「大系」「注釈」

・イホリする↓「私注」

問題の第三句「入潮為」は、海人を形容する語である。また、第四句「海人とや見らむ」は官人の旅愁をいう表現として知られる。

カツキとアサリは共に魚介類をとる意を持つ語であり、問題の歌と同じく「海人」と共に詠まれる用例も集中に確認できる。一方、イホリには漁をする意はなく、草や木で粗末な家をつくって住むことを表し、カツキ、アサリと比べてみても水・海のイメージが薄い。加えてイホリには、「海人」と共に詠まれる例が集中になく、候補から外して良いだろう。

そこで、集中のカツキとアサリの用例、そしてここで問題とする一二三四番歌の類歌について考察し、カツキとアサリのど

こちらが問題の歌の訓としてふさわしいのか検討していきたい。
 なお、万葉集の原文、訓読は『新日本古典文学大系』(岩波書店)に拠った。

一 カツキ説とアサリ説

注釈書はどのような根拠をもって第三句「入潮為」を訓んでいるのだろうか。ここに具体的に示そう。

◆カツキ：『全注』より引用

カツキの原文「入潮」は「潮二入ル」意の漢文的表記。「潮」は名義抄に「ウシホ、アサシホ、シホ」とするようになり、海水、潮流の意であるから「入潮」は海水の中に潜り入ることを意味する。したがってカツキ(元)が正しい。アサリ(類)ともよまれるが、どうか。略解に引く宣長説は「朝入」の誤りとするが、この「潮」は「湖」に誤る(元・紀)ものはあっても、「朝」とする写本はなく、誤字の上にならに二字の前後がいかかわったものと見ることは、困難である。「朝入」ならば借訓でアサリとよめる(一一六七、一一八六、一一二八)が、「入潮」では無理である。

◆アサリ：『注釈』より引用

「入潮」を元、古(三・三八ウ)、細、西にカツキとあり、類(十三・一〇五)、紀、陽その他アサリとある。考に「潮に入と書たるはかつぎと訓べき也」といひ、略解に「宣長

は、入潮は朝入の誤にて、あさりするならむと言へり」とある。「朝入」の例(一一六七、一一八六、一一二八)はいくつもあるが、「入潮」はここ一例のみで、アサリと訓む事少し義訓に過ぎるやうであるが「朝入爲流、人跡乎見座」(九・一七二七)などの例によりアサリと訓むべきであらうか。

カツキ説は「入潮」を「潮(海水・潮流)に入る」つまり「海中に潜る」意と捉えてカツキと訓み、アサリ説を表記の面から否定している。アサリ説は古写本にアサリとあることを示し、「朝入」をアサリと訓む用例があることから「入潮」を「朝入」の誤りとしてアサリと訓んでいる。

「入潮」を「潮に入る」と解釈すると、水に潜ることの他、船で漕ぎ出して行くことや海辺に打ち寄せる波の中に入っていくこと等も「潮に入る」意として考えられるので、『全注』のように潜水漁に限定することはできない。

また、アサリ説の「入潮」を「朝入」の誤りとする 것도『全注』が指摘しているように、誤字に加えて文字の転倒というのでは、やはり納得のいくものとは言えない。

二 カツキとアサリの用例

訓の候補はカツキとアサリの二訓である。では、集中でこの二語はどのように使用されているのか、それぞれ確認し比較したい。

(一) カツキの用例

四段動詞「潜く」の用例は全部で十九首二十例(①～⑱)を数える。原文表記は、仮名書きの例を除いて全て「潜」字表記である。

◆人が動作の主体になる例

- ① 野島の海人の海の底 沖ついくりに 鮎玉さはに潜き出(潜出) 船並めて：(巻六・九三三)
- ② 磯の上に爪木折り焚き汝がためと我が潜き来し(潜来之) 沖つ白玉(巻七・一二〇三)
- ③ 柴浪の志賀津の海人は我なしに潜きはなせそ(潜者莫為) 波立たずとも(巻七・一二五三)
- ④ 大船に梶しもあらなむ君なしに潜きせめやも(潜為八方) 波立たずとも(巻七・一二五四)
- ⑤ 海神の手に巻き持てる玉ゆゑに磯の浦廻に潜きする(潜為) かも(巻七・一三〇一)
- ⑥ 海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りし潜きする(潜為) 海人は(巻七・一三〇二)
- ⑦ 潜きする(潜為) 海人は告(の)れども海神の心を得ねば見ゆといはなくに(巻七・一三〇三)
- ⑧ 底清み沈ける玉を見まく欲(ほ)り千(ち)度(たび)そ告りし潜きする(潜為) 海人は(巻七・一三一八)
- ⑨ 伊勢の海人の朝な夕なに潜く(潜)といふ鮎の貝の片思にし(巻十一・二七九八)

⑩ 海人娘子潜き取る(潜取)といふ忘れ貝よにも忘れじ妹が姿(巻十二・三〇八四)

⑪ 耳無の池し恨めし我妹子が来つつ潜かば(潜者) 水は酒れなむ(巻十六・三七七八)

⑫ 大船に小舟引き添へ潜く(可豆久)とも志賀の荒雄に潜き逢はめやも(潜将相八方)(巻十六・三八六九)

⑬ 珠洲の海人の沖つ御神にい渡りて潜き取る(可都伎等流)といふ鮎玉：(巻十八・四一〇一)

⑭ 沖つ鳥い行き渡りて潜く(可豆久) ちふ鮎玉もが包みて遣らむ(巻十八・四一〇三)

⑮ 奈呉の海人の潜き取る(潜取)といふ白玉の：(巻十九・四一六九)

◆鳥が動作の主体になる例

⑯ 島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず(不潜)(巻二・一七〇)

⑰ 人漕がずあらくも著し潜きする(潜為) 鴛鴦とたかべと船の上に住む(巻三・二五八)

⑱ には鳥の潜く(潜) 池水心あらは君に我が恋ふる心示さね(巻四・七二五)

⑲ 紫の粉濁の海に潜く(潜) 鳥玉潜き出ば(潜出者) わが玉にせむ(巻十六・三八七〇)

右に示したように、カツキは「人」と「鳥」の両方が動作の主体となり得る。

人が動作の主体となる十五例(①～⑮)のうち、⑪と⑫はそれぞれ「池に身を沈める」、「(海で亡くなった)夫に逢いたい気持ちから海に潜る」ことを表しており、「海人」や「漁」とは関係がない。この二例を除いた十三例は「海人」が水中に潜ること、あるいは潜って海産物をとることを詠んでいるが、「潜く」を「海人」の生業として描いている歌は①の一例のみである。仮に問題の歌を「カツキする」と訓むとすると、「海人」が職業として水中に潜ることを意味する。つまり、問題の歌の歌意と一致する形で「潜く」が詠まれているのは①のみであり、この他の十二例には寓意がある。その詳細は次の通りである。

②は「海人」の潜水という辛く危険な行為を旅人自らがしているかのように歌うことで、恋しい人への思いを強調している。

③、④は問答歌であるが、『全注』に

海人の保護者の立場で、「吾れなしに」危険な潜きはする
など歌いかける歌。「潜き」を相手の異性が浮気(漁色)

することを寓意したものとする見方もできる。

とあるように他の注釈書においても解釈が分かれており、その歌意は定かではない。

⑤～⑧は玉に寄す譬喩歌であり、「海神」を「親」、「玉」を「その娘」、「海人」を「親が大切にしている女性に恋焦がれる男性」に譬え、「海人」が「潜きする」ことを「思いを寄せる女性を手に入れようと苦労すること」として詠む。

また、「鮑」や「忘れ貝」、「玉」(表現は異なるが同じ種類の貝と思われる)は「恋しい人」「会いたい人」に譬えられる他、その形状が片貝のように見えることから「片恋」の譬喩として

も用いられる。この「鮑」は潜水漁によって採れるものであるから動詞「潜く」は「鮑」や「忘れ貝」を導く為に使われているとも言えるだろう。

以上のように「潜く」を「海人」の生業として描いた歌は一例のみであり、その他は主に恋を歌った歌において譬喩的に用いられることがわかった。カツキの用例は「海人」特有の職能や身分の卑賤さを表すというよりは、「手に入れ難いものを手に入れようと苦心する行為」をいう譬喩表現として集中に存在している。

(二)アサリの用例

アサリの表記は仮名書きの例を除くと、「朝入」と「求食」の二種類である。カツキと同様、動作の主体として人と鳥の両方を確認することができる。人が漁をする場合は「朝入」、鳥が餌を探す場合は「求食」が用いられている。

◆人が動作の主体になる例

①あざりする(阿佐里須流) 海人の子どもと人は言へど見るに
知らえぬうまひとの子と(巻五・八五三)

②あざりす(朝入為)と磯に我が見しなりのりをいづれの島の
海人が刈りけむ(巻七・一一六七)

③あざりする(朝入為流) 海人娘子らが袖通り濡れにし衣干
せど乾かず(巻七・一一八六)

④黒牛の海 紅にはふももしきの大宮人しあざりすらしも(朝
入為良霜)(巻七・二二二八)

⑤ あさりする (朝入為流) 人を見ませ草枕旅行く人に我が名は告らじ (巻九・一七二七)

◆鳥が動作の主体になる例

⑥ 草香江の入江にあさる (求食) 蘆鶴のあなたつたつし友なしにして (巻四・五七五)

⑦ 朝には海辺にあさりし (安左里為) 夕されば大和へ越ゆる雁しともしも (巻六・九五四)

⑧ 夕なぎにあさりする (求食為) 鶴潮満てば沖波高み己が妻呼ぶ (巻七・一一六五)

⑨ あさりす (求食為) と磯に住む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも (巻七・一一九八)

⑩ 春の野にあさる (安佐留) 雉の妻恋ひに己があたりを人に知れつつ (巻八・一四四六)

⑪ 鴨すらも己が妻どちあさりして (求食為而) 後るる間に恋ふといふものを (巻十二・三〇九二)

⑫ ぬばたまの夜は明けぬらし玉の浦にあさりする (安佐里須流) 鶴鳴き渡るなり (巻十五・三五九八)

⑬ 沖辺より潮満ち来らし可良の浦にあさりする (安佐里須流) 鶴鳴きて騒ぎぬ (巻十五・三六四二)

⑭ 射水川湊の渚鳥朝なぎに濁にあさりし (安佐里之) 潮満てば偶呼びかはすともしきに (巻十七・三九九三)

⑯ 奈呉の海に潮のはや干ばあさりし (安佐里之) に出でむと鶴は今ぞ鳴くなる (巻十八・四〇三四)

人が動作の主体となる④⑤五例のうち譬喩歌は⑥の一例のみで、その他四例は作者が旅の途中に目にした風景や居合わせた場面を詠んでいる。特に④は「あさりする海人」をみすばらしく、卑下する対象として詠み、「旅人」が「海人」と見誤られることを不満に思う問題の歌の歌意と合致する。④の詳細は次の通りである。

④は、松浦川 (佐賀県東松浦郡玉島川) を訪れた旅人と娘子達の贈答の一部である。この歌の題詞で、「仙女ではありませんか」との旅人の問いかけに、釣りをする美しい娘達は「兄等は漁夫の舎の児、草菴の微しき者なり。郷もなく家もなし。何ぞ称げ云ふに足らむや。」と答えている。その娘子達の言葉を承け、④は「あさりする海人の子供だとあなた (仙女) は言うけれど、一目見てわかりました。高貴な方のお子であると」と歌う。

つまり、④によって

【題詞】「兄等は漁夫の舎の児、草菴の微しき者なり。…」

【本文】「あさりする海人」

の等式が成り立つのである。

ここまでカツキとアサリの用例を確認し、次の点が明らかになった。

共通点

・「海人」と共に詠まれていること。(カツキ↓十五例中九例、アサリ↓五例中三例)

- ・「人」、「鳥」の両方がその動作の主体となり得ること。
- ・人が動作の主体となる場合、訓字表記がカツキでは「潜」、アサリでは「朝人」に統一されていること。

相違点

- ・「海人」が「潜く」ことを歌った十三例のうち、「海人」の漁師としての営みを歌った例は一例のみであり、十二例は全て譬喩歌であること。アサリを含む歌はカツキとは逆に、五例中一例のみが譬喩歌で、四例は旅の風景を詠む。
- ・アサリの用例④とその題詞から「あさりする海人」が卑賤な者であることが明確になり、「海人」と「貴人」を対比させることでより身分の違いが強く表れている。カツキの用例において「海人」の身分が表面に出てくることはない。
- ・カツキは、得難い物を得ようと苦心する事をいう譬喩表現であり、アサリは海人の生息や職能を表現すると共に、その卑賤さを強調する語である。

問題の歌は譬喩歌ではなく、旅の景色を歌っている。しかも「旅人」が「海人」と見られる事への不満を表明するこの場面では、「カツキする」よりも「アサリする」のほうが「海人」の形容として適当である。

二 類歌

- ⑦ 荒たへの藤江の浦にすずき釣る海人とか見らむ旅行くわれを (巻三・二五二)

一本に云く、「白たへの藤江の浦にいざりする」といふ。

① 網引する海人とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に来し我を (巻七・一一八七)

右の一首は、柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ。

② 浜清み磯に我が居れば見む人は海人とか見らむ釣もせなくに (巻七・一二〇四)

③ 潮速み磯廻に居れば□□する海人とや見らむ旅行く我を (巻七・一二三四)

④ 白たへの藤江の浦にいざりする海人とや見らむ旅行く我を (巻十五・三六〇七)

柿本朝臣人麻呂の歌に曰く、「荒たへの」といひ、また曰く、「すずき釣る海人とか見らむ」といふ。

注釈書によつても少しずつ記述に違いがあるが、問題の歌④には類歌の関係にあるとされている歌が右に示した通り複数みられる。

⑦は人麻呂作、①は人麻呂歌集歌とされ、②③④には作者の記載はない。

④は天平八年(七三六年)遣新羅使人歌であり、⑦の異伝とされ、互いの左注にも記述がある。

問題の歌⑤を軸にして見ると歌番号の近い②とはミ語法から「已然形+ば」の確定条件節へと続き、第四句で「海人とや(か)見らむ」と詠む点で共通している。③には「くする海人」という形での「海人」の形容は見られないが、結句の「釣もせなく

に」が同等の表現であろう。㉗のように「浜清み」と詠んだ歌は集中に複数確認できるが、「潮速み」は㉘のみの表現である。さて、問題の歌㉙の下の句「海人」とや見らむ旅行く我を」は、疑問の助詞「か」と「や」の違いはあるものの、人麻呂作歌㉚とその異伝㉛とほぼ一致している。その上、第三句に「海人」を形容する表現が詠み込まれ、「くする海人」と続いていく形式も酷似し、まるで㉗と㉛に割って入るように㉙が存在している。そこで、㉙の類歌の一つである㉚とその異伝とされる㉛に着眼したい。

㉚には人麻呂作との記載があるが、㉛には作者名が示されていない。㉛は遣新羅使人歌であり、年代の記載（天平八年（七三六年））がみられるという点から、㉚が人麻呂の原作で時代を経て㉛に歌い変えられたと見るのが自然であろう。

「海人」について、㉚の人麻呂作歌で「すずき釣る」とするのに対し、㉛は「いざりする」としている。「いざりする」はやはり魚介類をとる意を持つ。「すずき釣る」が非常に具体的であるのに対し、「いざりする」はかなり広く一般的な表現であるとと言える。

このような「釣り」と「いざり」が対応関係にある例は、巻六の山部赤人の長歌とその反歌にもみられる。

〔長歌〕…あらたへの藤井の浦に鮪釣ると海人船騒き…（巻六
九三八）

〔反歌〕沖つ波辺波静けみ漁りすと藤江の浦に船を騒ける（巻
六・九三九）

イザリとアサリは共に漁をする意を持つ類義語であるから、この「釣り」と「いざり」の表現の変化と同じく、「釣り」と「あざり」が対応することもあるのではないかと考えた。実際に集中にその例を見ることができると。

〔題詞〕…聊かに玉島の潭に臨みて遊覧するを以て、忽ちに

魚を釣る女子等に値ひき。〔中略〕「児等は漁夫の舎の
児、草菴の微しき者なり。郷もなく家もなし。」…

〔本文〕あざりする海夫の子どもと人は言へど見るに知らえ
ぬうまひとの子と（巻五・八五三）

反歌は長歌の意を反復・補足あるいは要約するものであり、題詞もまた、和歌の前書きとしてその歌の趣意を伝えるものであるから、発想の似ている類歌間で表現を変えることとよく似ている。

よって、人麻呂作歌㉚「すずき釣る」が㉛で「いざりする」へと転換したように、㉚の「すずき釣る」が類歌である問題の歌㉛で「あざりする」に歌い変えられることは表現の変化として順当であると言えるのではないだろうか。一方、「釣り」と「かづき」の間での転換は一例も見られない。

用例に続き、類歌の点から見ても㉛をアサリと訓むことに問題はない。

ところでイザリとアサリが類義語なのであれば、問題の第三句は「イザリする」と訓んでも良いのではないかという新たな

疑問が生じる。

そこで、イザリ用の例に目を向けることにしよう。

- ① 沖づ波^な返^{かえ}波^な静^{しず}けみ漁^{いさ}りすと(射去^や為^な登^{のぼ} 藤江^{ふじえ}の浦^{うら}に船^{ふね}そ
騒^{さわ}ける(巻六・九三九)
- ② いざりする(射去^や為^な) 海人^{あま}の梶^{かき}の音^ねゆくら^{くら}かに妹^{いも}は心に
乗^{のり}りにけるかも(巻十二・三一七四)
- ③ 武庫^{むく}の海^{うみ}の庭^{にわ}良^よくあら^らしいざりする(伊射里須流^{いせりしゆりう}) 海人^{あま}の
釣^{つり}船^{ふね}波^なの上^{うへ}見^みゆ(巻十五・三六〇九)

右の三首から、イザリと歌う場合には比較的波が静かで穏やかな状況で漁をしていることが窺える。

この①～③に加えて、次の④～⑦をみると、

- ④ 山^{やま}のはに月^{つき}傾^{かたむ}けばいざりする(伊射里須流^{いせりしゆりう}) 海人^{あま}の灯^{ともしび}火^ひ
沖^{おき}になづさふ(巻十五・三六二三)
- ⑤ …わたつみの沖^{おき}辺^へを見ればいざりする(伊射理須流^{いせりしゆりう}) 海^あ
人^ま娘^{むすめ}子は小舟^{こぶね}乗^{のり}り…(巻十五・三六二七)
- ⑥ 志賀^{しか}の浦^{うら}にいざりする(伊射里須流^{いせりしゆりう}) 海人^{あま}明^あけ来^きれば浦廻^{うらま}
漕^こぐらし梶^{かき}の音^ね聞^きこゆ(巻十五・三六六四)
- ⑦ …海人^{あま}小舟^{こぶね}はららに浮^うきて大御食^{おほみけ}に仕^{つか}へ奉^まるとをちこち
にいざり(伊射里^{いせり}) 釣^{つり}りけり…(巻二十・四三六〇)

「船」や「梶」、「沖」などの言葉が詠み込まれる例が多く(イ

ザリの用例十例中七例)、イザリと歌う場合には、船を使った沖の漁を表現する傾向にあることがわかった。

アサリは先の用例からも明らかなように、磯や海辺といった岸近くでの光景を歌っている。よって、初句に「塩早三」とあり、潮の流れが早く磯廻にとどまっている状況にある問題の歌ではイザリではなく、アサリが選ばれたと考えられる。

四 原文表記「入潮」の訓読

ここまで用例、類歌について検討し、問題の歌においては「カツキする」よりも「アサリする」のほうが「海人」の形容としてふさわしいことを述べた。

しかし、原文表記「入潮」とその訓の整合性が問題となる。繰り返しになるが、「入潮」の表記は、問題の歌のみで他に例をみない。「入潮為」は正訓では訓めず、その語義に合わせて漢字を当てた義訓であると考えられる。ではなぜ「アサリする」に「入潮為」の表記を当てたのであろうか。

「入潮為」は、「潮二入ル」意をもって訓むことには違いないが、それは「水に湛る、くぐり入る」ことを指しているのではなく、「潮」字に動詞「濡る」の意が込められ、「潮に入って濡れる」ことを暗示したものかもしれない。

「潮」字は問題の歌の他、集中に十三例みられる。このうちの十二例は「海水の干満、潮流」の意で歌われ、「シホ」と訓むが、次に示した例のみ「ヌレヌ(濡れぬ)」と訓み、小網をさし魚をとろうとして、海水で袖が濡れてしまったことを歌う。

三川の淵瀬も落ちず小網さすに衣手濡れぬ（衣手潮）干す児はなしに（巻九・一七一七）

また、動詞「濡る」の用例には次の二首のように水の流れが早く、そのしぶきで濡れてしまったことを歌う例がある。

- ・松浦川川の瀬速み紅の裳の裾濡れて鮎か釣るらむ（巻五・八六一）
- ・武庫川の水脈を速みと赤駒のあがく激ちに濡れにけるかも（巻七・一一四一）

問題の歌も「塩早三」とあり、潮の流れに乗って打ち寄せて来る海産物を採ろうと、濡れながら漁をする海人の姿を、「磯廻」に居る自らの姿（旅人・官人）から想起し、「入潮為」の表記を当てたのではないだろうか。

問題の歌のように潮の流れが早い状況下では「カヅキする」や、舟を出して「イザリする」という行為は結びつかない。また、潮に「濡れた」姿は、「海人」のみすばらしい姿と「旅人」のうらぶれた姿を連想させ、問題の歌の歌意そして「アサリする」の語義とも符合する。

おわりに

問題の第三句「入潮為」は、集中他に例のない表記である。

その為、原文表記の面からではなく、カヅキとアサリの語を手掛かりに、用例の文脈や類歌間における表現の変化を中心に考察を進めた。その結果、次の点が明らかになった。

◇カヅキは譬喩歌の中で用いられることが多く、手に入れ難いものを手に入れようと苦心する行為として詠み込まれる。また、鮑や真珠といった「恋しい人」や「片恋」に譬えられる言葉と共に詠まれる。カヅキは、潜水漁で採られる鮑や真珠を導く役割を担う。カヅキにも漁民としての「海人」の営みを詠んだ例は一例あるが、アサリを含む歌にみられるような「海人」の卑賤さは描かれていない。

◇アサリを含む歌は譬喩歌一例を除き、その他の四例は旅の景色を詠んでいる。「あさりする海人」＝「卑しい者」であることを明確に表した用例があり、また「海人」と「貴人」を対比させ、身分の違いが顕著である。アサリは海人の生簾や職能を表現すると共に、その卑賤さを強調する語であると言える。問題の歌は旅の景色を詠み、「旅人」が「海人」と見られることを不服に思う歌であるから、歌意とアサリの語義が合致する。

◇類歌間で、「すずき釣る」から「いざりする」へ表現を変えた例があり、この他にも「釣り」と「いざり」が対応する例が集中の長歌・反歌にみられる。イザリとアサリは類義的に用いられる語であるから、問題の歌も、類歌の「すずき釣る」、「釣もせなくに」という表現から「アサリする」へと転換したと考えられる。実際に題詞と本文との間で「釣る」と「ア

サリする」が対応する例も確認することができる。一方、「釣り」と「カツキ」が対応関係にある例は一例もない。

以上の点から、問題の一二三四番歌・第三句「入潮為」は「アサリする」と訓むことが最もふさわしいと考える。原文表記「入潮為」が問題となるが、この箇所を正訓で訓むことはできない。そこで集中の「潮」字の用例から、「潮」字には動詞「濡る」の意が暗示され、「入潮為」は「潮に入って濡れる」ことを表していると考えると、訓「アサリする」とも馴染む。問題の歌は潮の早いことを詠んでおり、「カツキする(水に潜る)」や「イザリする(沖の漁)」という行為は歌意にそぐわない。

潮の勢いに乗って、水際に打ち寄せられてくる魚や貝をとろうと浅瀬に入っていく海人の姿、潮に濡れて汚れた「海人」の姿に、旅に疲れた自らの姿(旅人・官人)を重ね合わせ、「アサリする」に「入潮為」の表記を当てたのであろう。

近年の注釈書は問題の箇所について、「カツキする」と訓むものが目立つが、「アサリする」のほうが適切であると考える。

(あべ みなこ・修士課程二年)